



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	文学教材と文学教育の融和に基づく概念化と言葉による見方・考え方の向上(2年次):文学教材を用いた「深い学び」への視点とその活用(fulltext)
Author(s)	千田,洋幸; 渡邊,裕; 大澤,千恵子; 西川,義浩; 扇田,浩水; 加儀,修哉; 日渡,正行; 山口,俊雄; 山田,夏樹; 西山,一樹
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 47: 37-46
Issue Date	2020-07
URL	http://hdl.handle.net/2309/159372
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

文学教材と文学教育の融和に基づく概念化と言葉による見方・考え方の向上（2年次）

— 文学教材を用いた「深い学び」への視点とその活用 —

[代表者] 千田 洋幸¹⁾・渡邊 裕³⁾

大澤千恵子¹⁾ 西川 義浩²⁾ 扇田 浩水³⁾ 加儀 修哉³⁾

日渡 正行⁴⁾ 山口 俊雄⁵⁾ 山田 夏樹⁶⁾ 西山 一樹⁷⁾

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1) 東京学芸大学 日本語・日本文学講座 | 2) 東京学芸大学附属世田谷小学校 |
| 3) 東京学芸大学附属世田谷中学校 | 4) 東京学芸大学附属高等学校 |
| 5) 日本女子大学 文学部 日本文学科 | 6) 昭和女子大学 人間文化学部 日本語日本文学科 |
| 7) 青山学院高等部 | |

目 次

1. 研究の背景・目的	38
1. 1. 研究の背景	38
1. 2. 研究の目的	39
2. 研究の経過・方法	39
2. 1. 研究の経過	39
2. 2. 研究の方法	40
3. 研究の実際	41
3. 1. 「語り」に関わる事柄	41
3. 2. 研究授業（「故郷」）と「サブテキスト」への着目	42
4. 研究の成果と課題	45
引用・参考文献	46

文学教材と文学教育の融和に基づく概念化と言葉による見方・考え方の向上（2年次）

— 文学教材を用いた「深い学び」への視点とその活用 —

[代表者] 千田 洋幸¹⁾・渡邊 裕³⁾

大澤千恵子¹⁾ 西川 義浩²⁾ 扇田 浩水³⁾ 加儀 修哉³⁾

日渡 正行⁴⁾ 山口 俊雄⁵⁾ 山田 夏樹⁶⁾ 西山 一樹⁷⁾

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1) 東京学芸大学 日本語・日本文学講座 | 2) 東京学芸大学附属世田谷小学校 |
| 3) 東京学芸大学附属世田谷中学校 | 4) 東京学芸大学附属高等学校 |
| 5) 日本女子大学 文学部 日本文学科 | 6) 昭和女子大学 人間文化学部 日本語日本文学科 |
| 7) 青山学院高等部 | |

1. 研究の背景・目的

1. 1. 研究の背景

国語教育のなみならず、さまざまな場面で研究・理論と実践の結びつきの重要性や必要性が指摘されている。東京学芸大学での取り組みでも、例えば国語科コアカリキュラム研究プロジェクトでは、『国語の授業の基礎・基本小学校国語科内容』の冒頭に、「はじめに——教科内容に関わる研究が教育実践に果たす役割」として「ⁱ充実した国語の授業を行うためには、教材研究の基盤となる言語や文学に関する知識と理論、すなわち教科内容に関わる研究と、それを実践に生かすための授業方法の開発や理論化との、いずれもが必要となる。この両者は、国語科教育における車の両輪のようなもので、どちらが欠けても学習者にとって価値ある授業は構築し得ない」ということや、「文学」、特に小説・物語に着目し「ⁱⁱあるテキストを用いて授業を行ううえで土台となる教材文分析の視点やポイントについて、整理していくことはできるだろう。もちろん授業のなかで中心となる事柄は、それぞれの実態に合わせ変化するはずである。しかし、作品そのものをどのように捉える（把握する）のかといった部分は、新たな対象に出会うたびに姿を変えるものではない。（略）このような点を踏まえながら、本節では、宮沢賢治『注文の多い料理店』を題材とし、小説・物語を読むうえで共通する事柄、土台となる考え方についての理解を深めてもらえればと思う。さらにそれらを応用し、小説や物語の教材化の視点をも培ってもらいたい。」という点が指摘されている。

この研究で得た知見をいかしながら、学習指導要領改訂ということも踏まえ、「教材化の『視点』」ということからあらためて「文学教材を用いた学び」について考えていくことに取り組んでいく。さらにそこでの学びに「深まり」や「深さ」を捉えていくためには、どのような視点を導入すればよいのか、どのような手立てが考えられるか具体化することも行っていく。これらは「概念化」ということに関連させながら「言葉による見方・考え方」というとらえかたの効果について考える取り組みにもなる。

「文学を読む／学ぶ」ことを通じ、どのような視点を獲得することができるのか。またそれは「読む力」の変容として、社会生活の中でどのように活用することができるのか。そして、「なぜ文学を読む／学ぶのか」という問いに対してどのような応答ができるのか。今あらためてこれらのことを考えていく必要があるのではないかと。そしてその土台として、「文学研究と文学教材を用いた授業実践の融和」ということを具体化していきたい。

1. 2. 研究の目的

プロジェクト主題を「文学教材と文学教育の融和に基づく概念化と言葉による見方・考え方の向上」と設定し、「文学教材を用いた教育／授業」について文学研究がどのような部分に寄与し、どのようなことに役立てていけるのか、また文学研究の知見を「文学教材を用いた教育／授業」にどのように生かしていけるかを具体化する一つの捉え方を提示することを目的とする。これは、授業実践・教材研究について文学理論のアプローチを以て、文学教材を用いた授業の〈引き出し〉を増やしていくことにもつながる。このプロジェクトの成果を活用することで授業がどのように〈変わる〉のか、また教材選定や授業計画など授業の特色について俯瞰的に捉える視点を得ることに結びつけていく。

別の点からいえば、研究的視点で用いられている理論のデータベースを可視化しながら、授業実践での活用を図るといふ点からそれらを整理し、実践との整合性をあらためて検討していくことに取り組む。文学教材を用いた授業作りにおいて、「何を意識するのか」を明らかにしていくことで具体化される「コード」に着目し、その授業で働かせた「見方・考え方」を別の対象に読みかえていくことの効果を考える。これは教材の捉え方に理論的構築という視点から価値付けを行うことにもつながる。このようなことから、2年次の研究では「深い学び」への視点とその活用を具体化する。それらを生かすことで、教材研究段階から“授業の中で”どのように理論を応用していくのか、またその関連から（長期的な）カリキュラムマネジメントの視点についてとらえていく。

そのためには、先にも記したような「なぜ文学を学ぶのか」ということに立ち返り、「文学とは」「文学教材を用いた教育とは」という点を考えながら、そこから「何を得るのか」ということも示されなければならない。「何を」学ぶのか」ということを考えていく過程や方法、また視点や観点としては「何が書かれているか／どのように書かれているのか」ということを把握することは欠くことができない。しかし、そこで明らかになるものは“学ぶもの”全てとはなり得ない。だからこそ、「そこから何が」が問われ続けてきた。この点について切り口として「用語Ⅲ」に着目し、「文学教材を用いた教育」の汎用性の提示につなげていく。

このようなことを踏まえ、文学教材を用いた今日的課題を解決することのできる授業作り、教材研究の視点の提案を本研究の目的の具体として考えている。その中で、文学研究のアプローチを授業実践に取り入れるための方法についても検証する。文学教材を用いた授業実践をもとに、研究の視点やその効果を他の場面とどのように接続していくか。「資質・能力」ベースでの提案につなげることで、学校教育現場の現在の課題についての実践的な取り組みとして、授業作りの力の向上を図ることに結び付けたい。また、本研究をもとに大学での学びや教育実習での取り組みについて、専門性の向上ということに着目し成果を共有していきたい。異なる学校種での児童・生徒・学生の学びの深まりについて、教員養成や現職教員の研修に貢献できるような方法を検討していく。

2年目も目標を次のように設定した。

- 1) 新指導要領に提示される「言葉による見方・考え方」について、文学教育の枠組みでの具体的提案
- 2) 「文学を読む」意義について、「資質・能力」の観点からの分析・提案
- 3) 文学教育を通じて高められる「思考スキル」の具体化と、応用可能性の提示
- 4) 校種横断・連続性に着目した授業実践からのカリキュラム・教材の提案
- 5) 「読む力」の高まりと社会生活での効果についての検証
- 6) 教員養成・現職研修の質的向上

2. 研究の経過・方法

2. 1. 研究の経過

1年次の取り組みに関する報告を、2019年6月東京学芸大学附属学校研究会全体会プロジェクト研究成果発表分科会で行った。その際、「文学教育」とはどのようなものとして捉えているのか、またなぜ今「融和」という

ことに着目したのか（これまでなされていなかったのか）等、プロジェクトの土台となる部分を明確にするこの必要性が指摘された。これを受け再度プロジェクト全体の方針を確認・整理することを行った。その取り組みをまとめ整理したものが図1である。

特に今回のプロジェクトは、「文学教材を用いた」研究プロジェクトであるという点について、再度共通理解を図った。さらに、「文学教材を用いる」ということから、「文学」という厳然とした対象についてどのように捉えていくのかということではなく、対象を「どのように」とらえていくのかということが重要であることを共通の視点とした。対象（コンテンツ）にどのような理論を照射するかにより、それが文学研究となり、文学教材研究となる。そのような多様な可能性を持つものについて、文学研究的アプローチや授業の中で用いることの可能性を明らかにしていきたい。そのためには対象（コンテンツ）の特徴や特性を把握することが重要である。よって、特に授業研究において「コンテンツ特性を具体化する教材分析（教材化）を通じたコンピテンシーの深長を図る授業への発展」ということをねらいとする。コンピテンシーに発展させるためには、コンテンツの力によって支えられたものが発揮される必要がある。では、コンテンツ分析のための「コンピテンシー」とはなんなのか。こういった事柄の関わりなど、授業実践を通じて整理していくこととした。これはまた、コンテンツ・ベース／コンピテンシー・ベース、いずれにしてもどちらか一方を「ベース」としてとらえていくことを見直し、それらの相互作用に改めて着目することでもある。そのときは、派生するものに目を向けつつも、その取り組みを通じて「培うことのできる力」は明確にされるべきある。そしてそれは「一つ」に限られるものではない。「主一従」や「前景一背景」など大きな流れの中に埋め込むことで位置づけを明確にしていく。多様な可能性をもつ「コンテンツ」からどのようなことを切り出していくのか、それを用いてどのようなことを意識化し活用を図るのか、「コンテンツ特性」ということに注目し、それを明らかにしながら教材開発・実践研究にあたることとした。

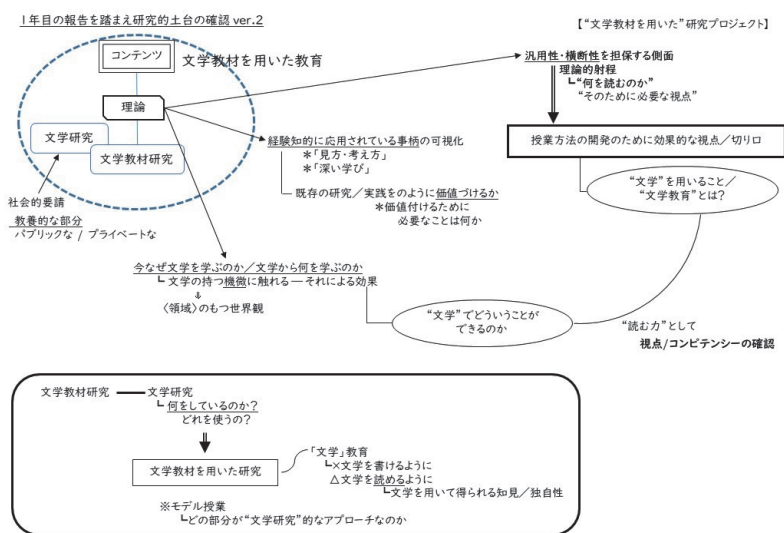


図1

このようなことを土台とし、文学教材を用いた授業実践の蓄積や本プロジェクトに応用できる研究の共有を継続しながら、定例会議の設定、テーマごとに定めたグループでの指導計画の検討や教材の収集など、教材・授業開発の具体化に取り組んだ。その際、これまでの実践の振り返りや先行研究等との比較を通じて、本プロジェクトでの取り組みの特性についても整理することを行った。それにより、「文学研究的な視点の導入」ということについて、単元の連

続性や先に挙げた「コンテンツ特性」への着目、さらに「サブテキスト」の活用という点が新たな研究課題として共有された。3年計画の2年次という点からは、体系性の考察につなげていくなかでそれらを支える事柄として有効に機能していると考えられるもの把握ということが具体的な成果として挙げられる。これらを次年度の「教材化」ということに発展させていきたい。

2. 2. 研究の方法

1年次の研究を踏まえ、次のような枠組みと教材での授業実践に取り組む。

枠組み	中	小	高		
作者 (語り手)	「少年の日の思い出」	「注文の多い料理店」	「こころ」	「山月記」	「羅生門」
テキストと虚構 (テキスト・作者)	「走れメロス」				
歴史と社会 (ジェンダー)	「故郷」		「舞姫」		

※空欄部分については、次年度以降教材開発を行う。

※高等学校については教材と項目の関連を考慮しグループ横断的に取り組んでいく。

今年度の新たな取り組み・成果としては、大学の授業で「文学」を取り扱う中で、本プロジェクトの視点を取り入れ、その成果を授業実践にも反映させていくことを試みた。また1年次にモデル案として提示した単元を別の授業者が取り入れ授業実践を行い、追試してみるなどが挙げられる。各グループでの授業実践や成果の公開にも取り組んでいるが、授業実践については授業公開の機会を設け、外部評価を得る機会を設ける予定である。研究成果の公開・発信の方法や機会については今後も検討し、3年次の課題としたい。

3. 研究の実際

3. 1. 「語り」に関わる事柄

今年度は次に挙げる教材、【小学校】「注文の多い料理店」、【中学校】「走れメロス」、【高等学校】「舞姫」について単元開発を行い、検討・協議を行った。この中で話題になった事柄について取り上げてみる。

「注文の多い料理店」にあたっては、学習歴との結びつきから「ごんぎつね」の読みを土台に、「語り手」や「語り」に関わる特徴の検討を行った。特に「語り手」を意識することにより物語構造や枠組みへの着目を促すことの機能や効果に焦点が当てられた。「語り手」に着目し、どう語られていたかを見ていこうとすると、「語り手」がどのような視点で見ているのか考えることが求められる。これは物語内容とは異なる部分に目を向けることにもつながり、物語の枠組みが意識化される。さらにその過程では、どの「位置」から物語を「見て」いるのか考えながら、自身のイメージと「語られるもの」とを対比させることが行われ、各自の「読みの枠組み」が自覚化されることが期待できる。さらに「語りの枠組み」が意識されることは単に作品を「外側」から見るというだけでなく、細部の記述への着目という姿にもつながっていくことが挙げられた。また作品内に描き出される事物について詳細に検討していく姿がみられた。しかし、物語内容から離れて意味づけていくのではない。ここから、例えば時代性などコンテキストに関わる要素を導入していくことも可能になる。そして、“場面”よりさらに“物語世界”全体へ、児童生徒の「読みの視点」が広がり、類型の物語の導入ということの可能性を見いだすことができた。このように学習者自らが見いだしてくる〈情報〉が大きく変化していくことで、「読みの深まり」が期待できる。

また“回想”“人称”“語り”ということについて、「少年の日の思い出」「羅生門」とのつながりについても指摘された。「ごんぎつね」の持つ構造的長所として“回想”ということが挙げられるが、これがきちんと把握できることは、「少年の日の思い出」の構造的性から「語り」への着目を促し、「語る」ことの意味を考えることでの「深まり」への発展が期待できる。大学での取り組みを通じ、「少年の日の思い出」については、大きく「蝶を盗む話」と、それにかかる「ぼく」の語りという「読み」のイメージがあることがわかった。しかしそれは作品の後半部分(=回想部分)に当たるものである。ではそこに前半部分はどのように関わるのか、この点を考えていくためには、語りへの着目と物語構造への視点が不可欠である。ここでは「人称」についても話題にしていく必要がある。この点について、「人称」は中学入学後の「用語」であること、またその段階での「読み」に効果を発揮するものではないかということが話題となった。生徒たちの発言の中で、自然に「人称」を意識したも

のが見られるようになる時期があるが、そこでは英語科での学びの影響が考えられる。このような他教科の学びとの関連付けができる要素については、次年度の単元開発を通じ注目していくこととした。

さらに「羅生門」については、「作者」ということが明記されるという構造的な側面とそれによる“人称”の感覚の薄まりが、小中学校の文学教材を用いた読みとどのように関連付けられるか、また「語り」「作者」という近代に入って強く意識された要素について、古典文学での〈私〉の感覚や3人称との入り混じるような特徴との結びつきや効果の可能性が示された。対象作品をどのようにとらえるのか。コンテンツ特性を土台に、「文学」という特性や変化への着目、文学用語の論理性などについても、今後「系統性のある学習」ということから検討を重ねたい。

3. 2. 研究授業（「故郷」）と「サブテキスト」への着目

今年度の研究の取り組みでは、加儀による「故郷」の研究授業を実施し、プロジェクトメンバー以外からの意見をj得る機会を得た。ここではその際の指導案を抜粋し示す。

1. 単元名

「『故郷』は何を伝えているか」～読み継がれるその裏側にあるものとは～

(教材名：『故郷』魯迅 訳 竹内好「現代の国語3」三省堂)

2. 単元のねらい

- (1) 『故郷』を読んで疑問に思った点(問い)を探求することを通じて、人物同士の関係やストーリー展開について理解する。
- (2) 他の「故郷」を描いた文学作品を読んで、「故郷」の描かれ方を考察することを通じて、「私」の故郷への思いを言葉にする。
- (3) 『故郷』が読み継がれる理由を、「私」の故郷への思いや、人物の描かれ方などから考えることを通じて、作品の価値を追求する。

3. 単元設定の理由

- (1) 『故郷』の作品価値を追求する場として

① 『故郷』が読み継がれる裏側にあるものとは

「中学校の国語教科書では、短編『故郷』が53年に教育出版に採用されて以来、(19)66年に光村図書、69年に三省堂と筑摩書房、そして日中国交回復の72年には学校図書と東京書籍の各版の教科書に採用され、現在に至っている。」(『魯迅——東アジアを生きる文学』藤井省三)とあるように、今年で採用から66年目になる。これだけ長い間中学生に読み継がれる背景には、どのような作品価値があるのかを探るために、まず各教科書(平成27年度版)にて設定されている学習目標を調べてみた。

教科書名	各教科書における学習目標
三省堂 (本校採択)	「私」と「閩土」の言動を根拠としながら、 <u>人間と社会</u> について自分の考えをもつ。
東京書籍	作品を読んで、 <u>社会の中で生きる人間</u> について考え、自分の意見を持つ。
学校図書	人物や風景の変化に象徴された <u>時代の状況</u> を捉える。
教育出版	「私」の抱いた「 <u>希望</u> 」や <u>社会の中で人間の生き方</u> について考え、自分の意見をもつ。
光村図書	<u>時代や社会の変化</u> の中での、 <u>人と人との関わり</u> について考えをもつ。

ここでキーワードとして浮かび上がるのは、「人間と社会」、「時代の状況」、「人間の生き方」、「人と人との関わり」である。つまり、「時代や社会の状況を踏まえ、人の生き方やその変化について考えさせる」点で共通している。

ここから、改めて『故郷』の作品価値について考えてみると、混乱する社会の中で、苦悩しながら生きてゆく人々の姿が描かれている点にあると考える。

主人公「私」が、「私」自身も家の没落により故郷に別れ告げなくてはならない状況にありながら、二十年振りに帰郷した故郷で目の当たりにするのは、当時の面影を全く失った人々の姿である。辛亥革命後の混乱のなかで、必死に生きるほかないその苦しみが、閩土や楊おばさんといった登場人物に投影されている。

やはり『故郷』が読み継がれる裏側には、単に語り手「私」の語る虚構の小説としてではなく、魯迅の経験が「私」によって語り直されている点が大きいと考える。それにより、現代の社会からは想像もできない人々の様子がリアルに伝える一方で、現代においても変わらない、社会の生き難さや人との関わりと言った、普遍的な問題も併せて投げかけている。『故郷』の作品価値を探る学習を中心に据えることは、生徒達にとっても、これまで経験しえない境遇に触れると同時に、身近にある問題について向き合うことにもつながると考える。

②「故郷」をどのように実感的に捉えるか

魯迅『故郷』を読む上で、「故郷との離別」を生徒たちに、どのように実感をもたせることができるかという課題がある。初読の感想において「故郷は憩いや安らぎの場であるはずだが…」といったように、一般的な「故郷」のイメージとして「大切なもの」、「美しいもの」として捉えている様子はどうかがえるが、東京で生まれ育った生徒たちにとって、「故郷とはどのようなものか」という本質的な意味は理解しにくいと考える。

ここで、魯迅『故郷』における「故郷」の描かれ方を、文中の描写をもとに考察してみる。

場面	掲載頁・行	文中における「故郷」の描写
私の帰郷	P154 16 P155 14	ああ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。…住み慣れた古い家に別れ、 <u>なじみ深い故郷をあとにして、私が今暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。</u>
少年時代の閩土との回想	P159 113	… <u>私はやっと美しい故郷を見た気がした。</u>
故郷との別れ	P165 119	古い家は遠くなり、 <u>故郷の山も水もますます遠くなる。だが、名残惜しい気はしない。</u>

まず、「私」が帰郷する場面では、「片時も忘れることのなかった」、「なじみ深い」のように、故郷への思いが表れている。それが少年時代の閩土との思い出を回想するなかで「やっと美しい故郷を見た気がした」と、その美しさを手にとるように実感する。

だが、最後の故郷との別れの場面においては、「名残り惜しい気はしない」と、自ら「故郷」との決別をのぞかせるような描写がある。この故郷との離別の場面を理解する上で、生まれ育った、何物にも変え難い「故郷」に「名残り惜しさ」を残さずに別れることができるのかという疑問が湧いてくる。「故郷」というテーマ性に実感の少ない中学生にとっては、この思いを解釈するのは難しいと考える。

そこで、初読の段階での疑問点をもとに、作品を理解するための問いを立て、小グループで課題解決をさせた後、「故郷」を描いた別の文学作品から、「故郷」というテーマの描かれ方について考察させたいと考える。これを通して、「故郷」を実感的に捉えさせたい。

具体的には、高田郁の短編小説『ふるさと銀河線』と、室生犀星の詩「第二の故郷」を取り上げる。

『ふるさと銀河線』は、北海道陸別を舞台に、両親を亡くした主人公 星子が、銀河線の運転士を勤める兄 康

晃とともに、進路選択を前に故郷を離れることに葛藤する話である。

星子は、「故郷って、人間にとっての心棒なんだと思うんだ。そのひとの精神を貫く、一本の棒なんだよ、きっと」という、馴染みの天文技師の話を聞いて故郷を離れることを決意する。

一方「第二の故郷」は、見知らぬ土地が故郷へとかわってゆく作者の思いを描いている。「私が初めて上京したころ どの街区を歩いてても 旅にみるような気がしてならなかった」という様子から、「東京がだんだん私をそのころから 抱きしめてくれた」変化してゆく。

「故郷は心棒である」という描かれ方や、「見ず知らずの土地も故郷へ変わってゆく」という故郷の描かれ方に触れた上で、魯迅『故郷』において、私の「故郷」への思いの変化について考えさせたい。

さらにこれをもとに、単元のまとめとして、読み継がれる『故郷』の作品の魅力や、その価値について言葉にさせたいと考える。

(略 ※渡邊による 以下同)

4. 単元の展開 (7時間)

	学習内容・学習活動	指導上の留意点
第一・二時	1) 『故郷』を読む上で必要な新出語彙の意味を調べ、その語彙を用いて短作文を書き語彙の使い方を知る。(言葉の小劇場) 2) 『故郷』を読んで初読の感想を書く。	○「寂寥」や「胸を突く」といった作品解釈における重要な語句に着目させるきっかけとする。 ○印象に残った人物や場面、表現、疑問に思ったことを言葉にさせる。
第三・四・五時	1) 初読の感想の交流を通じて、『故郷』における疑問点を挙げ、作品理解のための問いを小グループで立てる。 2) 各班における問いについて、本文や資料をもとに、登場人物の関係や作品の内容などについて分かったことや考えたことをまとめ発表する。	○登場人物や描写、象徴といった、文学作品を語る上での観点(2学年時に既習)を挙げ、問いを整理する上での手がかりとさせる。 ○問いによって、『故郷』のどのようなことがらが分かったのかについてメモさせる。
第六時(本時)	1) 「故郷」というテーマの描かれ方について、他の小説と詩をもとに考え、故郷への私の思いの変化について考える。	○「故郷」の描かれ方違いを見つけさせる。
七時	1) 学習のまとめとして、『故郷』が読み継がれる理由について考える。	○登場人物の描かれ方や、「故郷」のテーマ性をもとに考えさせる。

5. 参考文献等

- ・『魯迅——東アジアを生きる文学』藤井省三(岩波書店 2011)
- ・『魯迅と日本文学』藤井省三(東京大学出版会 2015)
- ・『文芸研の授業⑫文芸教材編「故郷」の授業』石野訓利(明治図書 2006)
- ・『教材再研究 循環し発展する教材研究』澤本和子(東洋館出版社 2011)

6. 本時の指導(第6時/7時間)

(1) 本時のねらい

- ①他の文学作品における「故郷」の描かれ方を考察することを通じて、「故郷」のテーマ性について考える。

②「私」の「故郷」への思いの変化を、「故郷」のテーマ性から言葉にすることを通じて、「私」の生き方について考える。

2) 本時の展開

(略)

7. 成果と課題

○他作品を読むことを通して、中学生に捉えにくい「故郷」について具体化し、魯迅『故郷』の読みに活かすことができた。

●他作品を読む時期（単元開始時の導入にすべきだったか）や、作品の選定について（魯迅『故郷』をどこまで掘り下げられるか）について課題が残った。

先に示した「類型の物語の導入」（または着目）とともに、「サブテキスト」への着目ということが、文学研究の視点の一つの特徴であるといえるのではないか。これらの着目にはそれを把握するための視点や枠組みが意識化、具体化されることが必要である。それを促すための支援の手立てをどのように行うのか、学習の積み重ねのなかでどのように培い活用を図っていくのか。コンテンツ特性を具体化するなかで、そこで機能する「言葉による見方・考え方」とらえていくことが本プロジェクトのねらいでもある。

「サブテキスト」等については、特に本単元開発を通じて焦点化されていったものである。前掲の研究授業において加儀は、「第二の故郷」（室生犀星）、「ふるさと銀河線」（高田郁）などを取り上げ、そこでの故郷の描かれ方の違いから〈故郷〉を捉えていくことを試みた。またプロジェクトによる事後検討においては、メンバーから石川啄木等の名前や作品が挙げられ、そこから発展する「距離感」ということへの着目が検討された。

〈故郷〉という言葉から想起される概念としては「読者」が有すると考えられる“ノスタルジー”のようなものについて、しかし捉え方の実感が、例えば先行研究の土台となった状況とは大きく変容していることは当然指摘できる。そのようななかで、変容に対し共時的な「読み」を当てはめることで見えてくるもの教材化も重要であろう。それだけでなく、「概念的に有する」ように担保される通時的な「読み」やコンテキストへの着目などによって顕在化する教材化の様々な切り口がそこにはある。それらを捉えていくにはどうすればよいか。その検討過程で、対象テキストの特性を把握したうえで他作品を導入し、同一の枠組み・視点で捉えながら、それぞれの作品に表れる特性や〈領域〉のもつ特性、対象の持つ課題などを明らかにしていくことが文学研究を主とするメンバーから“自然に”提案された。さらにそれを教材文の「読み」に再照射していくこともなされた。それはまた「深い学び」への視点としても機能するものであると考える。これまでの教材研究の中でも行われてきたであろうこのような行為やそれを支えるものを、コンテンツ特性への着目や具体的カテゴリーの中で整理していくことで、文学教材を用いた授業づくりの充実が図れるのではないか。またそれを行う「力」をどのように培っていくのかという点から捉え直すことで、「コンピテンシーの深長」ということに結びつくものとする。

4. 研究の成果と課題

今年度は、昨年度設定したカテゴリーを踏まえ単元開発・授業研究を重ねることで、「コンテンツ特性」や「サブテキスト」といった文学研究の知見を「文学教材を用いた教育／授業」にどのように生かしていくかを検討する捉え方を具体化し、共有を図ることができた。それらの活用について検討を重ねていく中で、現在の教育課題に呼応するものも見えてくると考える。そのためにはまた、他教科での学びとの結びつきを意識していくことの重要性など、新たな課題も示された。これらを踏まえ、教材分析・教材化を通じた「深い学び」への視点を明らかにし、具体的な提案を行っていくことが今後の課題である。さらに外部評価を受ける機会や公表につな

げていくことが「実践の中で生きる」ということから充実させていかなければならない点として挙げられる。それを含め、〈縦のつながり〉を「系統性のある学習」という面から整理していくことに継続して取り組んでいきたい。

(文責：渡邊 裕)

引用・参考文献

- i 国語科コアカリキュラム研究プロジェクト 編『国語の授業の基礎・基本小学校国語科内容』, 東京学芸大学出版会, 2014.3 (pp.3-5)
- ii 同 i (pp.174)
- iii ここでは, 例えば大熊らが『小学校 子どもが生きる国語科学習用語』(東京学芸大学国語教育学会, 大熊徹片山守道 工藤哲夫 編著2013, 東洋館出版)などで整理・提示しているような, 教科の学びに関わる「学習用語」とともに, 文学理論などを主とした研究的に活用されている「用語」全体を対象としてとらえている。